

図書紹介

真保潤一郎・高橋保『東南アジアの価値体系 3・ベトナム』現代アジア出版会、1971、339 pp.

本書は東京外国語大学のアジア・アフリカ言語文化研究所における共同研究の成果刊行物である。著者真保氏は高崎経済大学教授でベトナム現代史が専門、また高橋氏はアジア経済研究所の主任調査研究員で、東南アジア史、とくにインドシナ諸国の近・現代史の専門家である。

さて本書は2篇より成る。第1篇「ベトナムにおける農村社会の変動過程と価値体系」は本書の主篇をなし、高橋氏が執筆した。フランスの植民地支配下に入る以前から植民地時代を経て、独立後の今日に至るまでの間におけるベトナム農村の変貌と農民層の価値観の変化を時代を追って考察したもので、3章に分かれる。

まず第1章「ベトナムの伝統的村落社会」では、19世紀阮朝治下のベトナム農村と農民層の価値観を考察した。著者によれば、当時のベトナム農村は強固な自治的性格を有する村落共同体で、内部においては階層分化がかなり進行しつつあり、そこに住む農民の価値観は、日常生活では衣食住の充足、富と名誉の獲得を重視し、社会的には家族や村に対する忠誠を重んじたが、半面国家に対する忠誠はあまり重んじなかったという。次に第2章「西欧的価値体系の導入とベトナム農民の価値観」では、フランスの植民地支配と西欧的価値観の導入によるベトナム社会の変容の中における農村と農民層の価値観の変化に重点をおいて論述し、農民層はフランス支配によって強く影響をうけたものの、なお伝統的な価値体系は多くの面においてこれを保持したとする。さらに第3章「新しい農村社会と価値観の形成」では、独立後インドシナ戦争・ベトナム戦争を経過した今日までの間における南北ベトナムの農村および農民層の価値観の変化について述べ、北ベトナムでは新しい農村が形成され、社会主義的人間の形成をめざすホー・チ・ミンの指導により農民層に新しい価値

観が育成されたが、南ベトナムでは混乱がつづき、一般に価値観の分裂が見られるものの、農民層の間ではなお伝統的価値観が保持されていると説く。

なお第2篇「社会主義への道—近代化=社会主義的人間変革」は真保氏が執筆し、独立後の北ベトナムにおける社会変革とそれに伴う価値転換がどのようなものであるかを5章に分け論述しているが、これは要するに前篇第3章の一部を専門の立場から補説詳述したものである。

以上本書の内容を簡単に紹介したが、従来のベトナム研究に欠けていた価値体系の歴史的解明を行なった点で特筆すべき労作だといえる。なお著者自身の現地調査の成果も大いにとり入れていて興味がある。ただこの国の過去における中国との関係からみて中国的価値観の影響についていまいし詳しい説明がしてほしいかった。それはともあれ、本書はベトナムに関心をもつ者の必読の書であると言えよう。

(藤原利一郎・京都女子大)

Howard Palfrey Jones. *Indonesia: The Possible Dream*. New York: Harcourt Brace Jovanovich Inc., 1971. xx+473 pp.

インドネシアに関しての近頃の出版物の中でこれほど面白く読んだものはない。著者ジョーンズ氏は、1954年～55年の1年間 U.S. AID の Director としてジャカルタに勤務したあと1958年にアメリカの大使に任命され、1965年5月まで7年半にわたってジャカルタに在勤した。その間、非常に複雑なアメリカーインドネシア関係を現地で担当し、またスカルノときわめて親しい交際を続けた。有名なキャンディ・アダムスのスカルノ伝記も著者の勧奨によって出来あがったものである。

インドネシアを離任後、ハワイ大学の East-West Center の Chancellor を1968年までつとめたが、そのあとスタンフォード大学の Hoover Institute on War, Revolution and Peace において senior re-

search fellow として国務省の文書はもとより、きわめて文献の広範な参照に基づいてまとめたのが本書である。著者は、現在 Christian Science Monitor の刊行で有名な Christian Science Publishing Society の理事会会長を勤めている。

かれはまる4年ぶりにインドネシアを訪問した。ジャカルタでの昼食会に私は同席したが、彼はもっぱら聞き手にまわっていた。おそらく彼の離任後のスハルト政権下のインドネシアを知りたかった訳であり、この旅行は本書第4部の Back from the Blink の資料にもなったであろう。その時あまりスカルノ時代のことを話したがらなかったが、彼がスカルノ後半期のインドネシアを最もよく知っている人物だけに、私にはいささか物足りなく思われた。

ところが、この物足りなさは今度の本で充たされた。それどころか彼から見た、特にスマトラ反乱、西イリアン問題、マレーシア対決のインドネシア共産党の勢力増大などの体験から見たこの期間のインドネシアの政治、外交の動きが手に取るように伺われる。さらに、スカルノ大統領の行動や性格、特に決意までの過程がきわめて興味深くヴィヴィッドに描き出されている。

もっとも、1965年9月30日のクーデターについては、彼の離任後に起こったことであるだけに本書では GESTAPU と題して一章がさかかっているにすぎない。クーデターの指導者、大統領官邸の護衛将校 Untang 中佐が、このクーデターは「CIA がスポンサーをしている破壊運動である将軍会議が10月5日にクーデターを起こそうと計画していた。自分のクーデターはこの陰謀に対する予防的措置である。」と声明したことを本文で引用している (pp. 374-375)。この CIA 陰謀説に対しては、脚注で一行だけ、“This was pure fabrication. The CIA was a convenient scapegoat”. とかたづけている。この点もっと詳しい説明が欲しかった。

これだけの大部の回想録をシステマティックに、しかも興味深く読めるよう書きあげたことはたいしたものである。しかも、これは回想録というよりも、自分の体験を通してのインドネシア現代史であり、インドネシア観でもある。出来るだけ主観に陥らないように多くの文献資料によって裏づけしたのはまことに見事の一言につきる。

もっとも、著者としては書きにくいことがいろいろあったのではないかと思われる。インドネシア問題を取り扱う時の難しさがこの著書の場合はその地位ゆえに特に深刻であったであろう。筆を慎んでいるとの印象がところどころ見受けられる。

インドネシア現代史、特にスカルノ政権後半期については、最も貴重な文献のひとつであろう。これだけの仕事を果たされた著者に対し、心からの敬意を表したい。

(本岡 武・東南ア研)

飯島 茂『カレン族の社会・文化変容
—タイ国における国民形成の底辺—』東
南アジア研究双書5, 創文社, 1972,
315 pp.

同一社会内の民族的多様性と相互間の共存・拮抗、同化・統合の過程は社会学的・人類学的にきわめて興味深い重要な研究であるが、ことに発展途上国においては、それが国民社会の安定性に与える影響が大きく、また直接的であるために、それだけ実際的な問題として重要な意義をもっている。

タイ国の場合、このような民族問題は今日のところ顕在化していないが、潜在的に存在するのであって、早急に解決されねばならぬ重大な課題を構成するものとして意識されている。しかしながら、従来、少数民族に関する信頼度の高い資料に基礎をおく、包括的で、集約的な報告書は皆無であるといつてよい。本書はタイ国北部山地に居住するカレン族を取り上げ、著者自身による定着的な人類学的野外調査(1964~1966)の成果に基づいて、少数民族の問題点を国民形成の立場から解明した画期的なモノグラフである。

言語体系を異にするばかりでなく、その体系的知識を欠く部族民の調査は、よほどの経験がなければ、資料収集さえ困難であろう。著者はそうした不利な状況を克服するとともに、技術的には地域的・時系の変異を功みに利用しながら、カレン族社会の歴史

的变化を鮮かに描写している。しかも、著者は人類学のみならず、農業経済学、地理学、社会学にも造詣が深く、この歴史的变化の過程を「部族民社会」から「農民社会」への同化の過程、もしくは「山地民」の「平地民化」(plain emulation)の過程として分析している。この場合、既存の理論を当てはめて事実を解釈したり、組織づけたりするよりも、むしろ著者自身の経験的事実のなかから比較可能な理論的枠組を構築しようと努力しており、そういう意味で、実証的性格に富むとともに、きわめて野心的な書でもある。こうした専門的分析の後に得られた底辺の理解を通じて、少数民族の諸問題が具体的に考察される。本書の作成にあたっては、著者自身によるヒマラヤ山地民の調査と分析の経験と実績が大いに役立っているものと推察される。

以下、要約を試みるならば、第1章で山地民カレン族の概観を記した後、第2章～第5章において、平地民化の過程が分析される。すなわち、カレン族の村落構造は焼畑耕作に支えられる、移動的、血縁的なロング・ハウスに原型が求められるが、水田耕作が導入され、他方、焼畑禁止令によって七圃農業への転換が余儀なくされることによって、定着的、地縁的な村落が形成される。水田耕作は土地所有の觀念に変化を与え、総有制から個人所有に移行し、かつての血縁的な共同組織としての村は崩壊しはじめる。貨幣経済の浸透や現金収入としての水牛飼育はこうした傾向に拍車をかける。そして個人主義化と親族組織の弱体化が進行するとともに、宗教面では世俗化が起り、母系的な社会集団に関連する Oxe の儀礼は組織と信仰の両面において簡略化されたり、chakasi 運動によって廃止されたりして、カレン族固有の宗教は弱められるが、これらの現象は仏教の普及と深い関連をもつことが明らかにされる。しかし、他方、復帰運動的な現象も同時に見出され、たとえば、talutaphadu 儀礼が一例として挙げられるが、これは村神的な性格が強く、カレン族の村落社会が地縁集団として再編成される段階に出現するものである。こうした変容過程を分析するにあたっては、山地カレンと平地カレンがたえず比較され、国民形成ないしタイ人社会への同化として把握されているところに特異性がある。第6章と第7章では、政府による教育、宗教、言語の普及活動に対するカ

レン族の反応が分析されており、山地民対策に対する批判と提言が随所に見出される。最後に結語として、平地民化に関して理論的考察が試みられている。変動過程の分析に際しては、客観的条件のみでは不十分であり、主体的条件の重要性を力説しているあたり、しごくもっともとはいえ、いざ分析となれば見落とされやすいものである。なお、付録として末尾に付け加えられている「カレン族小史」と「焼畑農業」も、この種の研究者に貴重な資料を提供している。

本書は含蓄の深いモノグラフであるので、簡単な要約はかえって内容を無味乾燥なものにしてしまう。なによりも一読をお勧めする次第である。

山地民といえば、一国の経済発展からほど遠い問題であるかのように考えられがちであるが、すでに触れたごとく、政府が現に悩んでいる問題であることには間違いない。この機会に、著者と共に、発展途上国の少数民族の問題に目を向けることが望まれる。

(水野浩一・東南ア研)

Ronald Provencher. *Two Malay Worlds: Interaction in Urban and Rural Settings*. Berkeley: Center for South and Southeast Asia Studies, University of California, 1971. xii+211 pp.

本書はカリフォルニア大学南・東南アジア研究センターの Research Monograph No. 4 として、仮綴の体裁で出版されている。著者のねらいは、同じ伝統文化をもちながら、都市の集落と農村の集落とで社会環境がいかに異なり、またこの異なった社会環境が人々の社会的行為にいかなる差異を生ぜしめているかを、西海岸のマレー人社会に関して明らかにすることである。

この報告の基礎となった現地調査は、1964年9月から1965年12月にかけて行なわれた。調査地は、都市的な集落としてクアラルンプール市内の Kam-

pong Bahru とよばれるマレー人居住地区の一区画が、農村的な集落としてクアラルンプール近郊 Kuang における水稲およびゴムタッピングを生業とする農村が選ばれている。

本書の構成は、序論および九つの章において、これら二つの調査地の様態を交互に叙述することにより成り立っている。序論では方法論、第1章では調査地の概況、第2章では土地所有・借地・小作、第3章では職業・生業、第4章では世帯・階層・出身地など各種の社会集合、第5章では組織とリーダーシップ、第6章では基本的な役割の習得、第7章では対人作法、第8章では役割演技・行為様式、第9章では環境と相互作用との関係が述べられる。

都市的な Kampong Bahru における二つの階層、すなわち家主と借家人、および村落的な Kuang の住民という三つのグループに着目して比較が行なわれ、都市的環境における家主層の生活内容および行為様式が、マレー的な文化との関係において、最も

精巧な洗練されたセットを構成していることが明らかにされる。

本書における叙述の多くの部分は都市的な Kampong Bahru の生活に関してさかれている。これは歴史資料の量や住民間の相互作用の量や種類が多いことに関連しているが、同時にこれまでに数少なかつた都市のマレー人に関するデータを提供するという著者の意図にもよる。実際、この報告はこの最後の意味ではきわめて貴重なものといえよう。民族誌的な叙述の手法はときとして冗長に感じられるが、これを資料として扱うときには利用価値が大きいかもしれない。これに対して村落に関する叙述は簡略でやや物足りない。文化の厚みという点において、またそれを十分に発揮させる経済力という点において適当な村落が選ばれたかどうかに関しても一抹の不安が残る。ともあれ、都市のマレー人に関して新しいモノグラフが出たことは大変よろこばしいことである。

(坪内良博・東南ア研)